

## 第V章 総括

### 第1節 出土遺物について

今回の調査では、各横穴墓から土師器や須恵器、鉄製品、石製品、土製品、ガラス製品など多様な遺物が出土しているが、追葬や墓前祭祀の痕跡が確認されており、初葬段階の副葬品が原位置を保った状態で出土したものは認められなかった。出土した遺物のほとんどが、追葬時に掻き出されたもので、一部の横穴墓では、追葬や墓前祭祀などの儀礼行為に用いられたものが据え置かれた状態で出土している。本節では、器種ごとに特徴を述べ、総括としたい。

#### 第1項 土器の特徴と年代

出土した古代の土器は、土師器と須恵器があり、土師器には非口クロの整形と口クロ整形のものがある。非口クロ整形の土師器には、杯、椀、高杯、鉢、甕、口クロ整形の土師器には、杯、蓋、高台付杯、稜椀、高台付皿、須恵器には、杯、蓋、罐、長頸瓶、高台付壺、壺、甕がある。

横穴墓は追葬されることが一般的で、副葬品や墓前祭祀で使用した遺物には、時期差があることが知られている。このため、出土した遺物には、初葬段階から追葬や墓前祭祀段階の遺物が混在しており、造営期間中の時間幅を持つものである。本横穴墓群でも追葬や墓前祭祀の痕跡が確認されており、出土遺物には時期差が認められた。また、出土した土器は器種が多く、数量的にまとまりがあるものが少ないことから、分類を行って検討することができない。このため、横穴墓ごとに時期決定に関連する土器を中心に検討を行いたい。

**【1号横穴墓】** 追葬時に掻き出されたと考えられる須恵器長頸瓶（1）が出土しており、肩部が強く屈曲する扁平な体部のものである。体部の扁平形状に違いはみられるが、色麻町色麻古墳群第71号墳（宮城県1985）、東松島市矢本横穴墓群53号墓（東松島市2010）などに類例があり、8世紀前葉と考えられる。

**【2号横穴墓】** 須恵器高台付壺（1）と壺（2）が出土しており、高台付壺は底部が丸底状の出尻で、8世紀前半と考えられ、壺についても同様の年代が考えられる。

**【3号横穴墓】** 須恵器長頸瓶または罐（1・2）と甕（3・4）が出土している。須恵器長頸瓶または罐と考えられるものは、肩部が丸みを持つ扁平な体部で、肩部の下側に2条1組の沈線が二段巡り、沈線間には波状文が施されるもの（1）と肩部に櫛歯状工具による刺突文が施されるもの（2）で、ともに7世紀後半から8世紀初頭と考えられる。甕は外面に平行タタキが施され、内面に当て具痕がみられるもの（3）と外面に平行タタキ後に不連続のカキメが施され、内面に同心円文の当て具痕がみられるもの（4）がある。前者は8世紀代にみられるもので、後者はタタキや当て具痕が密で明瞭なことから、8世紀前葉以前と考えられる。

**【4号横穴墓】** 追葬時に掻き出されたと考えられる須恵器水瓶または淨瓶（1）が出土している。

丸底状の底部で、体部はやや縦長の球形で、2条1組の沈線が二段巡る。体部と頸部の接合は三段構成である。長く外側に延びる高台が付く。器壁が厚く、重量感のあるつくりである。黒褐色または灰赤色を呈し、灰オリーブ色の自然釉がみられ、猿投窯跡産の可能性がある。高台の形状などから、8世紀末葉から9世紀前葉と考えられる。

**【5号横穴墓】** 非口クロ整形の土師器杯（1～3）、椀（4）、須恵器長頸瓶（5）、甕（6～9）が出土している。土師器杯（2）は、器壁の厚い丸底で、体部から口縁部にかけて内湾気味に外傾している。調整は、外面が口縁部ヨコナデ、体部から底部はヘラケズリで、部分的に口縁部までヘラケズリが及んでいる。内面にはヘラミガキ後に黒色処理が施されている。南相馬市泉官衙遺跡館院跡 SI0803（南相馬市 2012）、多賀城市山王遺跡八幡地区 SD180B 区画溝下層（多賀城市 1991）などに類例があり、7世紀後半から8世紀後半にかけてみられるものである。近年の調査では、仙台市長町駅東遺跡や西台畠遺跡（仙台市 2008 ほか）において栗団式土器と共に伴しており、7世紀末葉から8世紀初頭の出土例が多く、本資料も同様の年代が考えられる。土師器椀（4）は、土師器杯（2）を大型化した器形である。8世紀前半に多くみられるもので、底部の形状などから土師器杯（2）と同様の年代の可能性がある。須恵器長頸瓶（5）は、肩部が強く屈曲する扁平な体部から、頸部が直線的に立ち上がるもので、頸部上半から口縁部が大きく開き、口縁端部は折り返され装飾されている。底部外面に高台が付く。1号横穴墓（1）と同様、8世紀前葉と考えられる。須恵器甕（6）は胴部外面に斜格子タタキが施されており、南相馬市京塚沢瓦窯跡産の可能性がある。京塚沢瓦窯は瓦陶兼用の窯跡で、泉官衙遺跡（行方郡家）に付属する寺院に使用された瓦の供給元と考えられており、瓦の生産は7世紀後半に操業を開始し、8世紀代には行方郡と標葉郡に用いられる瓦を生産した可能性が指摘されている（南相馬市 2012）。本資料は、8世紀代にみられるものである。甕（7）は一般的な集落から出土するものと大差がなく、8世紀後半以降と考えられる。甕（9）は口縁端部が平坦で、断面形が方形を呈する。胴部外面が格子タタキ後に不連続なカキメ、内面は同心円文の当て具痕がみられる。ともに単位が密で明瞭なもので、8世紀前葉以前と考えられる。

**【6号横穴墓】** 非口クロ整形の土師器杯（1～3）、ロクロ整形の土師器杯（4～8）、須恵器蓋（9）、須恵器長頸瓶（10・11）、須恵器甕（12）が出土している。土師器杯（1）は平底で、体部から口縁部にかけて内湾気味に外傾し、口縁端部に向かって器壁が薄くなるものである。口縁部外面にヨコナデ、体部から底部にはヘラケズリが施され、部分的に口縁部までヘラケズリが及んでいる。7世紀後半から8世紀後半にかけてみられるものだが、長町駅東遺跡や西台畠遺跡において栗団式土器と共に伴しており、7世紀末葉から8世紀前葉の出土例が多く、本資料も同様の年代が考えられる。杯または椀（3）は内外面ともに黒色処理が施されるもので、8世紀前半と考えられる。ロクロ整形の土師器杯は、いずれも内面黒色処理後にヘラミガキが施されるものである。底径や底部からの立ち上がりに違いがみられるほか、底部切り離し後の再調整も異なり、時期差があるものと考えられる。底部からの立ち上がりは、直線的に外傾するもの（5）、内湾気味に外傾するもの（4・6・7）、底径が小さく、底部からの立ち上がりが内湾して大きく開くもの（8）があり、底部切り離し後の再調整は、体部下端から底部にかけて手持ち

ヘラケズリが施されるもの（4）、体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリが施されるもの（7）、回転糸切り未調整のもの（8）がある。南相馬市金沢製鉄遺跡群（福島県 1995）のVI群及びVII群に類例があり、9世紀第1四半期を中心として第2四半期にややかかる時期及び9世紀第2四半期から第3四半期に位置付けられている。本資料は、器形や器高、再調整の状況から、9世紀前半のもの（5～7）、9世紀第2四半期のもの（4）、9世紀中葉から後半のもの（8）と考えられる。須恵器蓋（9）は、口縁部内面にカエリを持つ須恵器蓋である。体部に稜を持ち、口縁部が外反して外側下方に延びる。カエリは断面三角形の短いものである。天井部外面に回転ヘラケズリが施されるものである。胎土に細かい白雲母を多量に含み、焼成時の還元不良のため、にぶい黄橙色を呈する。胎土や色調の特徴から新治窯跡産と考えられ、7世紀第4四半期と考えられる。須恵器長頸瓶（10・11）はともに頸部に環状の凸帯が巡るもので、体部や高台の形状、頸部の幅などに違いがみられる。胎土がやや粗く、白色砂粒を多く含み、黒色の粒子が少ないとから、南相馬市入道迫窯跡（国士館大学 1984）や南相馬市大船廻A遺跡（福島県 1995）産の可能性が考えられる。高台の形状から、ともに8世紀末葉から9世紀前葉と考えられるが、10は頸部径が大きく、新しい時期の特徴が認められる。頸部に環状の凸帯が巡る長頸瓶は、隣接する川内廻B遺跡群1号竪穴住居跡に類例が認められる。

**【7号横穴墓】** 追葬時に掻き出されたものと考えられる須恵器壺（1）が出土しており、8世紀代と考えられる。

**【8号横穴墓】** 非口クロ整形の土師器杯（1・2）が出土している。平底またはやや丸みを持つ平底で、体部が内湾気味または直線的に外傾し、口縁部がわずかに外反するものである。相馬市・新地町善光寺9号窯跡（福島県 1989）、新地町三貫地遺跡18・20号住居跡（福島県 1987）に類例がある。8世紀代にみられるもので、8世紀前半を中心とする時期に出土例が多く、本資料も同様の年代と考えられる。

**【10号横穴墓】** 非口クロ整形の土師器杯（1・2）が出土している。土師器杯（2）は底部の器壁が厚い丸底で、体部から口縁部にかけて内湾気味に大きく開くものである。底部内面が平坦のものと丸みを持つものがある。口縁部外面にヨコナデ、体部から底部にはヘラケズリが施され、部分的に口縁部までヘラケズリが及んでいる。7世紀後半から8世紀後半にかけてみられるものだが、長町駅東遺跡や西台畠遺跡において栗圓式土器と共に伴しており、8世紀前葉の出土例が多く、本資料も同様の年代と考えられる。土師器杯（1）は丸底の小型品で、7世紀後半から8世紀前葉にかけてみられるものである。

**【11号横穴墓】** 口クロ整形の土師器杯（1）、須恵器長頸瓶（2）、須恵器甕（3～5）が出土している。土師器杯（1）は体部から口縁部にかけて直線的に外傾するもので、内面にはヘラミガキ後に黒色処理が施されている。底部切り離し後の再調整は、体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施されている。金沢製鉄遺跡群のVI群に類例があり、9世紀第1四半期を中心として第2四半期にややかかる時期に位置付けられている。本資料は、器形や器高、再調整の状況から9世紀第2四半期と考えられる。須恵器長頸瓶（2）は肩部が屈曲する体部で、体部上位には黄緑色の自然釉がみられる。湖西窯跡産と考えられ、いわき市御台横穴A群 28

号横穴（いわき市 1989）、矢本横穴墓群 46 号墳などに類例があり、7 世紀末葉から 8 世紀初頭と考えられる。須恵器甕（3）は外面にヘラナデが施され、内面には単位が密な青海波文の当て具痕がみられることから、8 世紀前葉以前と考えられる。須恵器甕（5）は 8 世紀代にみられるものである。

【13号横穴墓】 ロクロ整形の土師器杯（1～7）、高台付杯（8）、須恵器杯（9）、須恵器長頸瓶（10）、須恵器甕（11）、須恵器瓶類（12）、須恵器甕（13～17）が出土しているほか、試掘調査で壺類が出土している。土師器杯は、いずれも内面黒色処理後にヘラミガキが施されるものである。深身と浅身のものがあり、底径や底部からの立ち上がりに違いがみられるほか、底部切り離し後の再調整も異なることから、時期差があるものと考えられる。底部からの立ち上がりは、直線的に外傾するもの（6）、内湾気味に外傾するもの（4・5・7）、底径が小さく、底部からの立ち上がりが内湾して大きく開くもの（2）があり、底部切り離し後の再調整は、体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施されるもの（1・2・5）、体部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリが施されるもの（3・4・7）、回転糸切り未調整のもの（6）がある。金沢製鉄遺跡群のVI群及びVII群に類例があり、9世紀第1四半期を中心として第2四半期にややかかる時期及び9世紀第2四半期から第3四半期に位置付けられている。本資料は、器形や器高、再調整の状況から9世紀前半のもの（3・6）、9世紀前半の中葉に近い時期のもの（2・4・5・7）と考えられ、底径の小さいもの（2）は新しい時期の特徴が認められる。高台付杯（8）は、体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部が緩やかに外反するもので、須恵器の稜椀を模倣したものと思われ、9世紀前半の中葉に近い時期と考えられる。須恵器杯（9）は、体部が内湾して大きく開くもので、底部の切り離しは回転ヘラ切り未調整である。8世紀末葉から9世紀前半と考えられる。須恵器小型長頸瓶（10）は、肩部の張りが強く、体部と頸部の境に環状の凸帯が巡るものである。6号横穴墓出土の長頸瓶と体部や高台の形状が類似しており、9世紀前半と考えられる。須恵器甕（11）は、肩部が屈曲し稜を持ち、口縁部が内湾気味に大きく開き、口縁端部は短く折り返され装飾されており、比較的頸部の短いものである。胎土が在地窯跡産とは異なるため、搬入品の可能性がある。7世紀後半から末葉と考えられる。須恵器甕（14～17）は、最大径が胴部上位に位置するものと中位に位置するものがあり、胴部上位に位置するものは、最大径 70.00cm と推定される大型の甕がある。大型の甕（17）は口縁部外面に二段の櫛歯状工具による波状文と平行文が施されている。外面に平行タタキ、内面には同心円文の当て具痕がみられ、ともに単位が密で明瞭なものである。いわき市五反田 A 遺跡 2号竪穴住居跡（いわき市 1999）に類例があり、8世紀前葉と考えられる。

【14号横穴墓】 非ロクロ整形の土師器甕（1）、須恵器長頸瓶（2～4）、須恵器甕（5～8）が出土している。須恵器長頸瓶（2）は、体部下端が肥厚し、肩部の張りが強く、体部上位との境に稜を持つもので、頸部は直立して立ち上がり、頸部上半から口縁部にかけて大きく開く。口縁端部は内側上方につまみ上げられ、端部下端には凸帯状の隆線が巡らされ装飾されている。頸部外面には 2 条の沈線が巡る。口縁部から体部上位には黄緑色の自然釉がみられる。頸部外面にみられる沈線の有無などの違いはみられるが、須賀川市治部池横穴墓群 6 号墳（福

島県 1980)、矢本横穴墓 12 号墓、大崎市川北横穴墓群の伝世品（佐藤 2010）などに類例があり、湖西窯跡産と考えられ、7 世紀後葉から末葉と考えられる。須恵器長頸瓶（3・4）は、体部中位に最大径を持ち、底部外縁にハ字状に延びる高台が付き、内面には高台に沿って凸帯状の鋭利な隆線が巡るもので、口縁端部は上方に折り曲げられ装飾されている。頸部径及び底部径や口縁端部に違いがみられるが、ともに胎土には 1.00cm 弱の白色砂粒を微量含み、(3) は灰褐色を呈し、(4) は黄灰色ないし暗赤褐色または黒褐色を呈する。(4) には火襷痕がみられる。胎土や色調などが在地窯跡産と異なり、東海地方産の搬入品の可能性もある。矢本横穴墓群 13 号墳に類例があり、口縁端部の装飾が猿投窯跡 K-1 窯跡（尾野 2000）にみられることから、8 世紀末葉から 9 世紀前半と考えられる。須恵器甕（6～8）はいずれも 8 世紀前半にみられるものである。

**【15 号横穴墓】** 非口クロ整形の土師器杯(1)、非口クロ土師器碗(2)、ロクロ整形の土師器杯(3～9)、高台付皿(10)、須恵器フラスコ形長頸瓶(11)、須恵器甕(12～14) が出土している。非口クロ整形の土師器(1) は、上げ底状の丸底で、体部から口縁部にかけて直線的に外傾するもので、口縁部外面にヨコナデ、体部から底部にはヘラケズリが施され、部分的に口縁部までヘラケズリが及んでいる。内面はヘラミガキ後に黒色処理が施されている。本宮町北ノ脇遺跡 V 区 65 号住居跡（本宮町 2002）などに類例があり、7 世紀中葉から 8 世紀前半にみられるものである。ロクロ整形の土師器杯は、いずれも内面黒色処理後にヘラミガキが施されるものである。底径や底部からの立ち上がりに違いがみられるほか、底部切り離し後の再調整も異なり、時期差があるものと考えられる。底部からの立ち上がりは、直線的に外傾するもの(3・4)、内湾気味に外傾するもの(5)、内湾するもの(6～8)、内湾して大きく開くもの(9) があり、底部切り離し後の再調整は、体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリが施されるもの(3・8)、体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施されるもの(5・7・9)、回転糸切りで体部下端に回転ヘラケズリが施されている可能性があるもの(4) がある。金沢製鉄遺跡群の VI 群及び VII 群に類例があり、9 世紀第 1 四半期を中心として第 2 四半期にややかかる時期及び 9 世紀第 2 四半期から第 3 四半期に位置付けられている。本資料は、器形や器高、再調整の状況から 9 世紀第 1 四半期のもの(3)、9 世紀前半のもの(4・5)、9 世紀前半の中葉に近い時期のもの(8)、9 世紀中葉のもの(7)、9 世紀中葉から後葉のもの(9) と考えられる。ロクロ整形の土師器高台付皿(10) は、灰釉陶器の模倣品を真似てつくられたものと思われ、9 世紀前半と考えられる。須恵器フラスコ形長頸瓶(11) は、体部上半に黄緑色の自然釉がみられ、湖西窯跡産と考えられる。8 世紀初頭以前と考えられる。須恵器甕(14) は 8 世紀前半、須恵器甕(12・13) は 8 世紀後半以降と考えられる。

**【16 号横穴墓】** 須恵器杯(1)、須恵器瓶類(2・3)が出土している。須恵器杯(1) は、口径 9.30cm、器高 3.20cm の小型品で、丸底の底部から体部が丸みを持って立ち上がり、体部から口縁部が直線的に外傾するものである。外面の体部下端から底部に粗雑な手持ちヘラケズリが施され、内面の底部にはナデの痕跡がみられる。南相馬市鳥打沢 A 遺跡 1 号窯跡（福島県 1995）に類例があり、7 世紀中葉と考えられる。

【17号横穴墓】 非口クロ整形の土師器杯(1)、高杯(2)、椀(3)、ロクロ整形の土師器蓋(4～6)、稜椀(7・8)、杯(9・10)、須恵器杯蓋(11～13)、杯(14～16)、壺(18)、長頸瓶(19・20)、瓶類(21)、短頸壺(22)、甕(23・24)が出土している。非口クロ整形の土師器杯(1)は、底部の器壁が厚い丸底で、体部から口縁部にかけて内湾気味に外傾し、口縁部がわずかに外反するものである。多賀城市田屋場横穴墓群 SP1559 横穴墓群(柳澤 2010)に類例があり、8世紀前葉から中葉と考えられるが、7世紀末葉まで遡る可能性もある。非口クロ整形の土師器椀(3)は、金属器模倣の椀で、外面の一部にも黒色化が及んでおり、内外面黒色処理を意識しているものと考えられる。南相馬市泉平館跡1号流路跡(原町市 2001)や仙台市郡山遺跡Ⅱ期官衙期(仙台市 2005)、多賀城市山王遺跡八幡地区 SD180B 区画溝下層(多賀城市 1991)に類例があり、7世紀末葉から8世紀中葉にかけてみられるものである。特に、8世紀前葉を中心とする時期に出土例が多く、本資料も同様の年代と考えられる。ロクロ整形の土師器蓋と稜椀は、いずれも須恵器模倣品である。須恵器工人によってつくられたものと考えられ、蓋と稜椀はセット関係にあるものと思われる。蓋(4～6)はいずれも天井が平坦で、体部から口縁部にかけて外反し、口縁端部が下方につまみ出されおり、外反の度合いに違いがみられ、強いもの(5)と弱いもの(4)がある。ツマミは宝珠状のもの(4・5)とボタン状のもの(6)がある。外面の天井には回転ヘラケズリが施され、天井から体部にかけてヘラミガキが施されるもの(4・5)がある。内面は、いずれもヘラミガキ後に黒色処理が施されている。石巻市桃生城跡政庁 SB17 西脇殿跡(多賀城跡 1995)、山元町熊の作遺跡 SX1A 湿地跡(宮城県 2016)に類例があり、外反の度合いが強いもの(5)は、やや新しい時期の特徴が認められるが、いずれも8世紀第3四半期後半から第4四半期と考えられる。ロクロ整形の土師器稜椀(7)は、整形の特徴などから、ロクロ整形の土師器蓋(4～6)と同一の工人または集団によって作られたものと考えられる。本資料も同様の年代と考えられ、大船廻A遺跡に類例がみられる。ロクロ整形の土師器杯(9)は、内湾する体部から口縁部が直線的に外傾するものである。底部の切り離しは回転糸切りで、体部下端に回転ヘラケズリが施されている。金沢製鉄遺跡群VI群の特徴がみられることから、9世紀前半と考えられる。須恵器蓋と杯はセット関係にあるものと思われ、杯は高台付杯の代用品として使用された可能性がある。須恵器蓋(11～13)は、いずれもツマミは扁平な宝珠状で、体部から口縁部にかけて外反し、口縁端部が上下方向につまみ出されるものである。外反の度合いに違いがみられ、強いもの(11・12)と弱いもの(13)があり、天井に回転ヘラケズリが施されるもの(11・13)がある。桃生城跡政庁 SB17 西脇殿跡、熊の作遺跡 SX1A 湿地跡に類例があり、外反の度合いが強いもの(11・12)は、やや新しい時期の特徴が認められるが、いずれも8世紀第3四半期後半から第4四半期と考えられる。須恵器杯(14～16)は、体部から口縁部にかけて外反気味に外傾するもので、底部切り離し後の再調整は、体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリが施されている。法量は、杯(14)が口径 14.60cm、底径 7.80cm、器高 3.90cm、杯(15)は口径 13.80cm、底径 7.70cm、器高 4.10cm で、底径 / 口径比は、53～56 である。金沢製鉄遺跡群の土器群と比べるとIV群の長瀬遺跡 34号住居跡より口径と底径の差が大きく、本資料

は後出するものと考えられる。また、V群の鳥打沢A遺跡1号製鉄炉とは法量的に近似するが、底部の再調整が施されていないため、本資料より後出の特徴がみられる（福島県1995）。金沢製鉄遺跡群のIV群は8世紀第3四半期、V群は8世紀第4四半期を中心とする年代が与えられており、杯(14・15)は8世紀第3四半期後半から第4四半期と考えられる。須恵器壺(18)は、肩部上位の張りが強いもので、筒状の注口を持ち、底部周縁の外側に踏ん張る高台が付くもので、比較的丁寧なつくりである。高台付壺は出土例が少ないが、7世紀末葉から8世紀前葉と考えられる。須恵器長頸瓶(19・20)は、肩部が屈曲するもので、高台の有無と法量に違いがみられる。小型のもの(19)は、肩部の張りが強く稜を持つもので、8世紀前葉と考えられる。高台が付くものは、黄緑色の自然釉がみられ、湖西窯跡産と考えられる。大崎市川北横穴墓群B-4号墳（佐藤2010）、色麻古墳群第106号墳（宮城県1985）に類例があり、8世紀前葉と考えられる。須恵器瓶類の体部と考えられるもの(21)は、体部に丸みを持ち、体部上位に4条の沈線が巡る。黄緑色の自然釉から、湖西窯跡産とみられ、7世紀後半と考えられる。須恵器短頸壺(22)や須恵器甕(23・24)は、8世紀代にみられるものである。

**【18号横穴墓】** 非口クロ整形の土師器杯(1～7)、椀(8)、高杯(9)が出土している。非口クロ整形の土師器杯(1～4)は、浅身の皿状で、丸底状の平底と平底のものがあり、いずれも体部から口縁部にかけて内湾気味に大きく開くものである。平底のものは、口縁端部に向かって器壁が薄くなる。三貫地遺跡30号住居跡（福島県1987）などに類例があり、8世紀後半と考えられる。非口クロ整形の土師器杯(5)は、5号横穴墓(2)と類似しており、7世紀末葉から8世紀初頭の出土例が多く、本資料も同様の年代が考えられる。非口クロ整形の土師器椀(8)は、平底で体部が直線的に外傾するものである。8世紀後半と考えられる。非口クロ整形の土師器高杯(9)は、一般的な集落跡ではみられない器形で、杯部は丸底で、体部が内湾気味に大きく開き、口縁端部に向かって器壁が薄くなりわずかに外反している。脚部は中空で、上半は直立し、下半はハ字状に大きく開くものである。高杯は8世紀後半には組成から消失すると考えられており（菅原2007）、本資料は8世紀前半と考えられる。

**【搬入土器について】** 今回の調査では、湖西窯跡産またはその可能性があるフラスコ形長頸瓶(15号-11)や長頸瓶(11号-2、14号-2、16号-2、17号-20・21)、猿投窯跡産またはその可能性がある水瓶または淨瓶(4号-1)や長頸瓶(14号-3・4)など東海産須恵器が出土しており、湖西窯跡産のものは7世紀後半から8世紀前葉、そのほかは8世紀末葉から9世紀前半のものと考えられる。東海産須恵器の流通には、在地氏族や関東地方から移配された氏族のネットワークが深く関係していたと考えられており（佐藤2010）、本横穴墓群でも、17号横穴墓の天井構造に房総半島の一宮川流域との関連が想定されるほか、常陸国新治窯跡産須恵器と考えられる須恵器蓋(6号-9)が出土していることから、関東地方から移配された氏族との関係が推定される。なお、本横穴墓群周辺は『和名類聚抄』に記載されている陸奥国行方郡の多珂郷があった付近と考えられており、現在でも常陸国多珂郷に由来する「高」や常陸国久慈郡大甕・大甕神社に由来する「大甕」の地名が残っており、常陸国からの移民との関連が想定されている（南相馬市2017）。